

## 建国初期の社会再編における売買春の実態

——中国福州市で逮捕された、ある「台基主」<sup>(1)</sup>に対する聞き取り調査——

(お茶の水女子大学大学院) 林 紅

### I. はじめに

1949年10月中華人民共和国が成立すると、中国共産党は社会改造を通じて社会を再編しようと試みた。その中には、解放された都市や地方で売買春を廃絶することが含まれていた。ところが、その実態を明らかにした研究や、その問題をめぐる諸関係の具体相を明らかにした記録は、私の知る限りまだ少ない。私は1998年以来、1950年代の売買春問題を課題として、当時の売春女性、「台基主」、役人だった人たちを追跡調査し、福州市における官公庁の資料館（檔案館）、特に市公安局檔案館および市中級人民法院檔案室にある売買春根絶に関する文書の調査を行い、それらを通じて福建省の省都である福州市の売買春根絶政策の実施実態を解明することに取り組んできた。

建国初期（1949—56年）の各省、市の売買春根絶の過程は複雑、多岐である。1950年1月の「中央公安部の妓院閉鎖の経験に関する通達」<sup>(2)</sup>は、各省、市が北京市の売買春根絶の実践を参考にするよう促してはいたが、必ずしも全面的に見習う必要のないことを強調している。中央政府は、阿片禁止や土地改革にかかわる法令を公布したようには、売春禁止を法令にしなかった<sup>(3)</sup>。各省、市においては、それぞれの実情に即した売買春根絶の方策がとられたのである。

福州市は、中国の東南沿海部にあり、台湾に対する軍事上の緊張状況<sup>(4)</sup>や、経済的基盤の不備があったため、売買春根絶が本格的に実行されたのは社会主義改造の終結期で、他の省、市と比べてかなり遅れていた<sup>(5)</sup>。福州市政府・公安部門は、1955年12月11日に大規模な娼妓収容に踏み切るま

では、かなり長い期間、戸籍管理に基づくゆるやかな売買春取締りしか行わなかった。

本稿では、当時の「台基主」であったZ氏へのインタビュー記録を中心にまとめ、建国初期の福州市における売買春とその取締りの実態を明らかにすると同時に、そこに反映された社会問題、社会下層にいた庶民の生き方を再現することを意図している。それは、単なる中国の一地方のことといったものを超えて、1949—56年の中国社会再編を研究する上で、大きな示唆を与えるものである。文中の×はプライバシー保護のための名前の伏せ字であり、〔〕内は筆者による補足説明である。

### II. 追跡調査の経緯

私は1998年7月より、50年代の売買春取締り研究のため、中国現地で追跡調査を開始した。その中で、当時売春宿を経営していた「台基主」であったZ氏へのインタビュー調査を、夏休み中の帰国の機会を利用して、3年にわたり、計5回行った。

Z氏は1927年3月〔彼は誕生日の正確な記憶がなかった〕浙江省温州市に生まれた。家が貧しかったので学校に行ったのは1、2年だけで、15、6才の頃国民党の兵隊に連行されて故郷を離れた後、二度と故郷の土を踏むことはなかった。しかしなお出生地の訛りが強く、聞き取りは容易ではなかった。

彼の過去の基本的な状況については、1955年10月9日福州市公安局の作成した「台基主・娼妓の身上調査書」（原文は「調査台基・妓女登記表」<sup>(6)</sup>）という史料によって知ることができた。彼は、1955年12月11日福州市で一挙に逮捕・収容された「台基主」と売春女性を合わせた102名中、男性2

名のうちの1人であった。当時28歳。Z氏の身上調査書の「経歴」欄には以下のような記載がある。

- 1939-45年 国民党東北某軍当番兵  
 46年 被弾〔地雷〕により両足を失う  
 46-49年 83病院にて療養  
 49-54年 古着の売買をする  
 54-55年 「台基」をする  
 (12月11日収容される迄)

Z氏の現在の居所については、ある民政局退職幹部の記憶を手がかりに、『福州民政志』の中の福州市社会福利機構〔養護施設〕の概況を調べ、電話で照会した結果、「福州市第二社会福利院」<sup>(7)</sup> (以後、福利院と略称) にいることが確認できた。

2000年5月14日の午後、第1回目の訪問をした。軍用小型車<sup>(8)</sup>に乗り、難なく福利院の門を通り抜けた。車を降りると、受付の当直員が私たちをZ氏が住む居住棟の前に案内してくれた。そこには体臭と糞尿の臭いが入り混ざったような悪臭が漂っていた。庭にいた精神障害者と思われる人たちが、がやがや騒ぎ出したのには驚いた。だれかが「Zさんはいないよ」と告げると、当直員はすぐに人をやって呼びに行かせた。私は庭を離れ、敷地内にある道ばたの木陰で彼を待った。まもなく石段に沿って下る道を、両足とも膝から下を失ったZ氏が松葉杖をついて、速いテンポでこちらに近づいてくる姿が見えた。私は急ぎ足で迎えに上り、道ばたの石のテーブルの側に腰掛け、インタビューを開始した。

時刻はすでに4時近くになっていた。活気のない沈滞した雰囲気施設の、突然招かれざる客がやって来て写真撮影や録音をはじめたことは、複数の職員の不安を掻きたて、福利院の住人達の好奇の視線を招くことになったようだ。「あいつは誰だ」「何しに来たんだ」と聞きに来る者がいたが、Z氏は追い払い、まともに取り合わなかった。また「写真を撮るな」と警告をしにきた職員がいた。私は「個人的な用件でZさんに会いに来て彼

の撮影をしているので、決して取材記者の類ではない」と答えた。しかし福利院の中の雰囲気をよく知らず、初対面でもあったので、あまり突っこんだインタビューのできる環境ではなかった。5時ごろ夕食開始の院内放送が流れたので、私はそれを口実に別れを告げた。

1年後の2001年5月25日、私は福州市に戻り、6月12日、電話でZ氏がまだ福利院にいることを確認した。以前のように健康で記憶力も良好であるが、長年外出していないので、外出して福州市の変化を見たがっていることを知った。私はちょうど彼の為に何かしてあげたいと考えていたので、6月17日に彼を車で散策に連れ出すことにした。

窓から景色がよく見えるように、彼に車の前の座席に座るように勧めた。彼は少し遠慮していたがそこに座ってくれた。明らかに興奮している様子で、道中ずっと彼の話は止まることがなかった。

まず、出来たばかりの金牛山公園で彼を車から降ろして、写真を何枚か撮った。はじめ彼は遠慮がちに、「車中からちょっと見ただけでもう充分だ」と言っていた。私は彼に「車から降りてぜひ外を見て欲しい」と心から願った。衆人環視の中、彼は少しぎこちない様子だった<sup>(9)</sup>。私に恥ずかしい思いをさせたくなかったためらしい。

次に、江浜大通りに沿っていくつかの公園を車中から眺めた。それから、江浜公園で車を降りて写真を撮り、静かな芝生の場所に座って1時間半近く話をした。この時彼はとても多くのことを語ってくれた。

2度目の訪問からまた1年を経た2002年6月26日の8時ごろ、再び車で彼を連れて市街地に入り、新たに拡張された福州市台江区中亭街をざっと見て回った。彼は「以前この街に露店をならべ商売をしていたが、今はこんなになってしまい全く分からなくなってしまった」と語った。9時ごろから、知人が住んでいる退官軍人用住宅の敷地内で3回目のインタビューを始めた。今回は50年代の

(34)

売買春とその取締りについて、私がとても知りたがっていることをはっきり彼に伝えた。そして昨年彼の話から、これらの状況を彼が熟知していることがわかったので、もっと詳しく話してほしいということを強調した。私は彼を自称しているように飲食店の手伝いとして扱い、「台基主」として逮捕・収容された事実を承知していることは覚られないように注意を払った。このようにしたからこそ、彼は次第にリラックスして、見聞きしたことの一切を生き生きと描写したのであろう。

この時までは、Z氏が「台基主」だったという事実をこちらから触れずにいたが、彼に正面からこれらの問題に答えてもらうために、私は熱いうちに鉄を打つ方針で、近いうちにまた訪問し、この事を明らかにして彼がどういう反応を示すかを見ることにした。

7月2日午後6時頃、わざと事前の連絡をせずに彼を訪ねた。おそらくこの時間ならZ氏はいると思ったからだ。予想通り彼は建物の中で他の人と一緒にテレビを見ていたが、私が来たのを見ると少しびっくりした。今回〔4回目のインタビュー〕、私は率直に彼がどのように「台基主」になったのか、またどのように逮捕・収容されたのかについて聞いた。彼は詳細に語ってくれた。インタビューが終わる前に、私は本にまとめたいので、当時逮捕・収容されていた売春女性を何人か探し出して話ができるといいのだが、と伝えた。彼はそういう人を探してくれると言った。

しかし、7月11日、電話をかけると、Z氏は「まわりの連中が、過去のああいっただことは、どうしても触れられたくないと言うんだ」、さらに「もし書き上がって新聞などに出た日には、下手をしたら殺されるかも」と言ってきた。1950年代に政府主導による政治運動<sup>99</sup>が毎年のようにあり、死者が出たことなどは、彼の記憶にやはり深く残っているのだ。

7月13日昼の1時頃、彼を車に乗せて、「湖辺」という村にいる彼の知人Q氏を訪ねた。Q氏は88歳、身体は大変健康であったが、不安げな様子であり多くを語ろうとしなかった。それはもしかしたら、奥さんがそばで、「あの人は何しに来たの」「何を聞かれたの」などと警戒して何度も聞いていたからかもしれない。聞き取りの続行は不可能となった。

以下、上記の聞き取り記録〔他の史料と相違するところは取り除く〕に基づき、建国初期の福州市における売買春およびその取締りの実態を検証してみよう。

### Ⅲ. 売買春の実態およびそこに反映された下層庶民の生活様相

#### 1. 売春業の選択と生計

1949年8月17日に福州市が解放される直前、Z氏が療養していた軍病院のスタッフや患者のうち、台湾に引き揚げられる者は引き揚げ、動ける者は逃げ去っていた。彼のような身動きがとれない者は見棄てられた。幸い療養していた時、病院の近くに住む農民と交流があり、ある農家の夫婦が彼を慰めて困難があったら援助してあげると言ってくれた。まもなくこの夫婦の友人が来て「おまえさんは足が無くても大丈夫、頭がいいから商売を学んだらきつとうまくやれるよ」とも言ってくれた。そこで彼はその友人が紹介してくれた米屋に住み込み、昼間は入り口で露店を出して古着を売り、いろいろな客への対応の仕方を学んだ。1952年以降政府が露店を禁止したと聞き、今度は台江区鴨母州で飲食店をしている友人の手伝いをした。

その後、台湾国民党軍による空襲<sup>100</sup>で、彼が住んでいた台江区鴨母州一帯は全部焼き尽くされ、彼の住処も焼けて何もなくなってしまった。飲食店の主人が彼に、「おまえは足がないから、他のことはやれない。「台基」を開いた方がいい、たとえ捕まっても飢え死にするよりましだ。金がな

いなら、おれが立て替えてやる」と言った。そこで、Z氏の名義で、2階が3間、1階が3間の家を借りて、1人の女性を雇って宿の管理と雑用をまかせ、「台基」の商売を始めた。1955年1月20日国民党軍の空襲被災後、李氏と資本を（半分ずつ）出し合い、改めて「台基」を開いた<sup>12)</sup>。

当時の社会状況についてのZ氏の認識によると、建国初期の庶民生活は、民国期とそれほど大きな変化はなかった。「解放直後一時的な混乱の後、みんなはやらねばならないことなら何でもやった。〔福州市人民〕政府は全てを接管管理することはできず、全ての人に仕事を与えることもできなかった。だから、寄る辺のない庶民たちは、ぼろ売りはまたぼろを売り、売春をする者は引き続き売春をし、小商いをする者は元のように小商いをした。一方、金持ちは依然として多かった。金持ちの家では扇風機や電灯を使っていたが、貧しい家は蠟燭やランプを灯していた。電話はあるにはあったが大変少なかった。大きな店にはあったが、自分がいた米屋や飲食店には無かった。人々の生活の格差はととても大きかった」。

1949年から1956年社会主義改造の終結期までの中国社会経済構造は、未だ国営経済と私営経済の並存状態であった。1949年の福州市は、30あまりの民国政府の官僚資本系企業および官民合資系企業を接管し、国営としたが（『当代中国的福建』上、64頁）、企業の圧倒的多数は民間資本系の企業であり、かつその多くは労働者や職員によって経営されていた零細手工業であった。「36万の人口の中でほぼ10万人の失業および半失業者がいた」（『当代中国的福建』下、351頁）。政府が掌握している企業はごく少数だった。Z氏は、他の寄る辺のない庶民たちと同じように、自分で生計を立てなければならなかった。資金も技能も持っていない身体障害者の彼にとって、「台基」はとつきやすい生業だったのではないだろうか。

## 2. 売春宿とその経営様式

売春宿の建物は、2階建と1階建の両方があった。多くは人の往来が頻繁でかつ逃げるのに都合の良い場所（前門臨街、後門通路）に位置していた。宿は、広間に果物やお茶が置いてあるようなやや高級な所もあれば、ごく普通の民家もあった。やや高級な売春宿には、警察の捜査に対応するためさらに隠し部屋を備えたところもあった。私が取材した当時の派出所の婦人警官の話によると、真っ暗で部屋の中に固いベッドが一台置いてあるだけの宿もあった。私が「それでも男と女が遊べるんですか」と聞くと、「まさしく動物ね」と、その婦人警官は答えてくれた。このような売春宿は、おそらく結婚できない労働者の性欲のはけ口だったのであろう。

売春宿の部屋には、だいたいベッド、洗面器、水を汲む木桶があった。多くの宿では「依嫂」と呼ばれる使用人を雇い、水汲みや、売春女性たちの食事その他の雑用をさせた。客が一人来るとして使用人はすぐ水を2瓶部屋に持って来た。ひとつは客の洗面用、ひとつは売春女性の事後の洗浄用であった。このことから、福州市の用水は依然として井戸の汲水であり、売春宿には浴室がなかったことがはっきりわかる。このような衛生環境では、性病感染の恐れがないはずがなかった。

それにもかかわらず、買う者は買う。買春の料金は売春女性の条件によって決まっていた。「開包」（処女で初めて客をとる）の場合通常100元<sup>13)</sup>、70元や80元のこともあった。なかには十数回も処女料金を取った売春女性もいたという。Z氏は愉快そうに笑って、「全部うそだよ」と言った。普通は一回1, 2, 3, 5元、もし一晩いるなら10~20元必要だ。料金はたいてい3:7に分けて、3割を宿主に払い、7割を売春女性の収入とした。「台基主」はその3割の収入からいろいろな支出分〔派出所の警察への袖の下も含めて〕を差し引くと、残りは多いとはいえなかった。前述の『身

(36)

上調査書』の記載事項によると、Z氏は毎日平均2元ぐらいが(純)収入で、その辺りでは稼ぎの多い方であったという。これは、当時の都市労働者の平均月収<sup>10)</sup>よりも多い。

金銭の支払いについては、「皆一回ごとに現金払い。万が一捕まったりしたらまずいからね。中には客と本気になって、料金をまけたり、客から金を取らなかったりする女もいたが、そういう時は自分の小遣い銭から自腹を切って宿主に払わせた。ただ客からの隠れた心付けには、宿の中じゃ誰も口出ししなかった」。

Z氏の回想によれば、売春宿の多くは8-10人の売春女性をかかえていた〔この人数は筆者が統計をとった26カ所の平均3-4名より多い。この統計は公安局が逮捕者の供述によって得た数字から取ったものだが、明らかに実際より少なく申告されている〕。Z氏の売春宿は最盛期には8人の女の子がいた。皆15、6才で、昼間に来て夜帰って行った。宿に泊まりたければ泊まれた。売春女性は「台基主」との間に何の契約も無く、儲かる場所であればどこでも行くというのは常識であった。例えば、「台基主」Aの待遇が良くなければ、売春女性はすぐに他の売春宿に行った。「台基主」は売春女性を金のなる木と見なし、緩やかな相互関係を結んでいた。

上述のような売春宿は「妓院」と呼ばれているが、実際は、登録制であった民国期の「妓院」とは質を異にし、非合法下で密かに経営されたものである。「台基主」と売春女性との関係は、場所を貸す者と借りる者の関係であり、身体拘束状態ではなかった。すなわち、この時期の売春は以前のような性の奴隷制ではなく、性的サービスの売買であった。

### 3. 買春男性と客引きおよび接客の様相

Z氏の話によると、1949年の解放以後も、権力や金を持っていた者は以前と変わりなく売春宿で

遊んでいた。客筋は主として資本家や商人だったが、天秤棒を担いで商いをする小売商人もいた。彼らは上客であった。政府の公務員や軍人もいたが、さすがに少数であり、遊びに来ては私服だった。さらにゴロツキやチンピラもいたが、彼らは賭博で稼ぐとすぐやって来た。この種の人たちは低級な客である。

当時、売春女性たちの間では「解放軍は金をたくさん持っている。わずらわしくない、うるさくない客だから、最もよい売春の相手だ」と噂されていた<sup>11)</sup>。その理由を聞くと、「あの当時解放軍は〔規律が厳しくて〕一回外出するんだって大変だったからね。金も多く持って出るわけよ。女の子と遊んでも捕まるのを恐れてびくびくしていたから、みんなそそくさと出入りして、値切ったりすることもなく、事が済めばさっさと帰った」。

変わった嗜好の客もいた。たとえば香港から来たある客は、相手に自分の鼻を噛ませ、尻を叩かせた。また、4人の相手を同時に要求した者もいた。99歳になる老人が遊んでいる最中に死んだこともあった。もう少しで警察沙汰になるところだったが、運良くこの台基主が普段から賄賂をはずんでいたのを見逃してもらった。さもなければ検死をされていためつけられ、面倒なことになるところだったという。Z氏はこれらのことは実際にこの目で見たものだと強調し、「金があれば誰でも皆女と遊びたくなる。90才の爺さんさえまだ遊びに来るんだから」と言い添えた。まさしく買春は男性の娯楽だったようだ。私は間髪を入れず重ねて聞いた。

「それではあなたはどうですか」

「正直言うと俺だって遊んだことはあるよ。ただそんなに多くはないがね。だって俺はいやって、いっほど性病のやつを見てきたからな。怖いさ」と、彼は答えた。

客の多くは知人の紹介で来る。埠頭の客引きが連れて来る場合もある。遊んだにしろ遊ばなかつ

たにしろ、客はみな客引きに案内料を払わねばならない。埠頭では専ら客引きをする、あるいは客を案内する10代の女の子がおり、客一人連れてくるごとに5-8角をもらっていた。そのほか、宿主か使用人が、宿の門口や路地の入り口で「いらっしやい、入ってちょっとお茶でもいかが?」と呼び込み、客引きをしていたのである。客は入ると自由に相手を選んだ。常連客の多くは直接指名し、新客は広間で待っている女たちの中から、誰にするか選んだ。指名料はなかった。客はだいたい料金を知っていたから、普通は金額でもめることもなかった。

時には売春女性も門口で客を引いた。自分で客を連れて来たり、自分に紹介する客はいるかどうかを宿主にたずねに来たりする売春女性もあったが、こうしたケースは少なかった。ほとんどの場合、売春女性は昼間には宿主の家で麻雀などをやり、遊びながら客を待った。そして、賄い費を払い、宿で食事する。食材が買い揃えられていたから、たとえ食べなくても返金はしなかった。

#### 4. 売春女性と化粧、性病の防止および避妊

売春女性の身元はいろいろであった。「役者たちはお金を稼ぐために、芝居に出た後さらに売春しに行く者が多かった」とZ氏は言った。また、農家から来た者も少しいた。彼女らの大部分は福州市内の中亭街や鴨母州あたりに自分で部屋を借りて住んで、自由に売春宿へ通った。

売春女性は身なりにはとても気を使い、お化粧にも念を入れた。当時も口紅は売られていたし、パーマもあった。皆少しでも人より美しく着飾って、より魅力的になって客の気を引こうとした。「実際のところ彼女たちは特別美しくもなかったが、醜くもなく、十人並みの容貌が多かった。しかしお化粧をすると皆魅惑的になった。彼女たちが街を歩けば、身なりやお化粧、歩き方など一般の通行人とは違うので、すぐ見分けがついた」と、

Z氏は語った。

Z氏は今でも何人かの美人のことを憶えていた。スタイルが良く肌つやのある大変美しい女性がおおり、笑うと愛くるしく、口元も可愛かった。彼女は最も多い時で1日に27人を相手にしたことがあった〔普通は1日に多くて7-8人、少ない時は1-2人であった〕。働き通しでずっと「疲れた、疲れた」と言い続けていた。×××という女の子は美人だったので香港からの客に見せられた。その客は彼女を香港へ連れて行こうとしたが、他の女の嫉妬を買い、警察に密告され捕まってしまう、だめになってしまった。

もう一人の女性は国民党軍人の娘で、母親、弟と一緒に北方から福建に逃げてきた。母親は病気で、とても気の毒な状況であった。彼女が売春で稼いで家を支えていくしかなかった。はじめてこの世界に足を踏み入れた時、彼女は「恥ずかしい」と言い、顔色が暗かった。Z氏は「いくらきれいだって飯が食えなきゃどうにもならんだろう?」と言った。彼女の容貌は美しくしとやかで愛らしく、客を上手にもてなし、「またおいでくださいね」とか「あなたがとても恋しいの」といった言葉がうまかった。

さらに、Z氏は盗癖のある女性のことをこう語った。「ある女が客の金銭を何度か盗み、客はそれに気付いたが、客は顔色一つ変えずに、ある日その女の膣の中に硫酸水を注ぎ込んだ」。

Z氏の記憶によると、性病を防ぐため、「売春女性たちは毎週あるいは隔週、馬という姓の医者のところに行き、検査をしてもらった。当時10人のうち3人は梅毒や花柳病と呼ばれる性病にかかっていた。医者が出す薬は牛乳のように白色でラードのような『西林油』というもので、輸入品のため高価だった。『606』と呼ばれる薬もあった。医者は売春女性たちに膣の消毒を施した」。

「50年代前半コンドームを使わず売春女性たちはどのように避妊していたのか」と、私が聞くと、

(38)

Z氏は、「あのころはそんな物あるもんか、医者  
が女たちに薬の使い方を教えたよ」と答えた。彼  
はどんな薬か具体的には話さなかった。妊娠した  
場合は堕胎したが、普通は妊娠しなかった。彼は  
「売春する女たちはみんな、事後膣を洗浄して、  
精液が自分の中に流入しないように避妊のコツを  
おぼえていた。彼女らは抱え主や同業者の先輩か  
ら、本気にならずにわざとらしくやってこそ多く  
こなせる、でなければ1人か2人ですぐ疲れて動  
けなくなってしまうと教えられていた」と言い、  
さらに彼が知っている医者のおさんはほとんど毎  
年出産して13人の子供を産んだが、一回堕胎をし  
た際に死んでしまったことも話した。

ここまで述べてきた福州市における売買春の実  
態は、売買春根絶という公式的な言説のかげに隠  
れて、長い間ほとんど知られていなかった。

#### IV. 福州市政府による売春取締りの実施実態

##### 1. 警察と売春取締り

Z氏は、建国初期の北京、上海などの都市で  
「妓院」が閉鎖され、売春女性たちが収容された  
ことについて聞いたことがなかった。「福州市で  
は常に警察が戸籍調べをしており、これに出くわ  
して捕まったら運が悪いと思うしかなかった。警  
察が戸籍を調べにくると、売春女性たちはいつも  
従姉妹だとか義理の妹だとか言い逃れをした。こ  
うして密かにやれば捕まらないですむが、たまた  
ま周りの人間に告発され捕まってしまうことがあ  
る。普通は捕まっても数日から一週間で釈放され  
た。捕まらなかった者は続けていたし、拘置所か  
ら出てきてもまたこの仕事を続ける者さえいた。  
そうしなければ食べていけないからね」。

Z氏の知るところでは、解放後売春宿を開設し  
た者は多く、その十中八、九は警察とつながって  
いたという。「地元のゴロツキによるゆすりや警  
察の捜査から、どうやって逃れていたのですか」  
と、さらにつっこんで聞くと、「答えは一つ、金

をやることだ。ゴロツキに対しては、たばこや酒  
でもてなし、金を貸してやり、にこにこ顔で迎  
える。でなければ彼らは宿に来て騒ぎを起こし、大  
声で怒鳴るので、客が寄りつかなくなり、宿主は  
ますます損する。警察はいつだって俺みたいな8、  
9人以上抱えている大物だけをねらっているか  
ら、やや大きい売春宿はみな人に金を払って、公  
安派出所の巡察情報を得ていた。そして、警察の  
人が来ると、売買春をしていた者は跡形もなく逃  
げ失せてしまう。あるいは、警察が捜査に来たら、  
金をパッと手渡すのさ、そうすればいつまでもこ  
ちらに関わっていないよ。金を渡さないと、奴は  
近くを巡回してうろつき、客が来なくなって、商  
売あがったりになっちゃう」。

「解放後大胆な者は相変わらずこの商売を続け、  
気の小さい者だけが止めた。そのころは客引きな  
んてなかば公然とやっていた。ある友だちの『お  
前は足がないから、何も怖がることはない。たか  
だか送り込まれたところで、すぐ出られる』とい  
う助言を真に受けて、まさにこわい者無しって感  
じたね。警察が来るといくらか金をやっでごまか  
したさ。金をやつらにねじ込んでおけば、いい関  
係が保てたよ。何かあるとあっちから事前に情報  
を流してくれるから。たとえば、今晚は気をつけ  
ろとかね。金を欲しがらない奴がどこにいる」と、  
彼は言う。そこでは『金銭通用（万能）』という  
ルールが支配していたことがうかがわれる。

##### 2. 逮捕・収容と収容施設

福州市では、売春業者の大規模な収容は1回だ  
けだった。Z氏はその時のことをよく覚えている。  
夜、いきなり100名あまりの人をつかまえて、新  
設された婦女生産教養院に連れて行ったのである。  
彼ともう一人の男性は婦女生産教養院の隣にあ  
る第一生産教養院に収容された。「本当は俺を  
処罰したかったんだが、俺は足が無かったから、  
収容となったわけだ。捕まった中で最も年少だっ

たのは15才の少女だった」。

「その際、みんな逃げなかったんですか。あなた達を逮捕・収容する時、警察は何と言いましたか」と聞くと、「その夜いきなり俺の周りの数十軒〔の台基〕が一斉に捜査された。俺のところは女の子4人が捕まった。残りの4人はその日いなかった〔実際その4人は収容の対象になっていない〕。逃げて捕まったら罰はもっとひどくなる。つかまえに来たのは、ほとんどが馴染みの派出所の警察官だった。逃げ隠れはできないよ」と答えてくれた。

彼の記憶では、警察官は「これからお前たちを別の場所に連れて行き、別の仕事をさせる。今後は二度とこんなことするな」と言っていた。

彼は収容されていた間に、「靴の製作、兎、豚などの飼育に取り組んだ」と、誇らしげに言った。

### 3. 受刑の「台基主」と社会復帰者

はじめZ氏は、逮捕・懲役になった李××〔Z氏と売春宿を共同経営した〕のことを話題にするのをわざと避けていたが、私が再三この男のことを持ち出したので、彼もあきらめて話してくれた。

「李は受刑した〔5年の懲役〕。彼の（内縁の）妻××も売春により収容された」。

私は「当時売春禁止に関する法律は無かったのに、何を根拠に人を逮捕・処罰したのですか」と繰り返し聞いた。

彼は「あのころは法なんかいないよ。捕まれば、刑罰が収容のどっちかだ。我々は仕方がない。ちゃんとした仕事があれば誰がこんなことやるかね。俺だって生きる路があれば、人に誘われても悪いことは絶対やらない。女たちだって仕方なく売春していたんだ。病気を怖がっていたからな」と言った。

「教養院を出た後はほとんどの女が結婚した。多くの方は後指を指されなくて済むように、誰も知り合いのいないよその地方に移り住んで行っ

た。昔の恋人と結婚する者も少なくなかった。結婚後、子供を産んだ者も多かった〔Z氏が知っている何人かはみな子供を産んだ〕。李氏の内縁の妻も教養院を出た後、別の男と結婚し、2人の女の子を産んだ。産めない者はたいてい梅毒を病んだ経験があった」。

「多くの人は教養院を出た後、もう〔売春を〕二度としなくなる。一度収容され怖い思いをすると、二度としようとは思わないから。売春、これはやむを得ずしたことだ。人に蔑まれるものだったんだから」と、彼は強調した。

建国初期の福州市における経済的基盤の不備、売春宿の不良な衛生環境などの状況で、売春に就くのは、確かにやむを得ない選択であった。そこには、人身売買や前借金のようなあからさまな強制はなかったかもしれないが、「自由意志」ともいきれない。「ちゃんとした仕事があれば誰がこんなことやるかね。俺だって生きる路があれば……」というZ氏の発言は、当時の売春女性達の圧倒的な本音だろう。収容された元売春女性が、政府による社会復帰・就職斡旋に感謝する<sup>106</sup>のは、こういうわけだったのである。

## V. おわりに

Z氏は福州市における売春研究の追跡調査対象の中で、最も大胆に、また最も多く話してくれた人物であった。建国初期の売買春を話題にするのは中国ではいまだに禁忌となっているのだが、それにもかかわらず彼は話してくれた。その理由は、少なくとも二つあると考えられる。一つは、彼は家族や親戚が誰もいないため人に迷惑をかけると遠慮する必要はないし、また本人自身も生死を既に度外視しているからである。もう一つは、私がいろいろ工夫し、彼に近づく方法を見つけたからである。つまり、このような「社会下層グループ」への聞き取りに際しては、聞き取りの対象を既定の枠にはめないようにし、知人・友達のように対



することである。聞き取りの対象を既定の枠にはめると、相手は自分に与えられた役割に沿って考えるので、歴史の証人として自由な発言がしにくくなる。もちろん、「枠にはめない」聞き取りをするにはさまざまな配慮や遠回りが必要となり、短兵急にというわけにはいかないし、すべての対象にこの方法が有効だともいえない。

本稿の主人公のような都市無職・無産者は、建国初期、政権交替の社会的な急変によって打撃を受けたが、彼らの生活の様相にはあまり変化がなく、依然として生存のために社会の底辺で何でもやっていた。そして、そこでの売買春現象は、独裁的社会主义体系が確立する時まで、言い換えれば、私的な空間が完全に抑圧されてしまうまで存続していた。社会現象としての売春は、その社会の経済格差と男女の格差、男性の買春風習や買春ニーズ、就職の困難等々、さまざまな問題を忠実に反映したのではないだろうか。

いまだに売買春現象・売買春問題を直視することを避けている中国においては、いつになってもその問題性がなくなることはない。その実態を明らかにすることと、それを分析する新しい理論的枠組の構築が必要とされることだけは、確かなように思われる。

#### [注]

(1) 本稿では「台基主」という用語をそのまま使うことにする。「台基主」或いは「台基」という言葉は、1950年代公文書と公安局の史料で使用されていたもので、「台基主」は売春宿の主人を指し、「台基」は売春宿を指す（たまには売春宿の主人を指す場合もある）。中国の『漢語大詞典』にも台湾の『中文大辞典』にもこの用語は載っていないが、『語海：秘密語分冊』（上海文芸出版社、1994年2月）や『上海話流行語辞典』（漢語大詞典出版社、1994年6月）などの専門的な辞書には「台基」という項目があり、旧時代にお

ける秘密の下等な売春宿を指す言葉としてい

る。武舟『中国妓女生活史』（湖南文芸出版社、1990年8月、309頁）には、上海の台基については、「密売淫の仲介的な形態、即ち、台基主が女性を雇わず、客が来る毎に臨時に女性を呼ぶ形態である。また、台基に来る女性の多くは、自分の意思で売春をする良家の女性であり、また身分的に高い女性もいた」と記述されている。「旧上海的娼妓制度和解放後の禁娼」（中国公安部公安史資料徴集研究領導小組編『公安史資料』、1992年第2期、302頁）には、解放後、私娼に密かに売春させる台基主を制裁するという記事があり、「台基主」の註として「売春場所を提供する人」と記されている。福州市公安側が1950年代の売春宿を「台基」と称したのは、「秘密」の売春場所という意味をこめたのであろう。

- (2) 「中央公安部關於封閉妓院的經驗通報」『党的文献』1996年第4期。
- (3) 中央人民政府法制委員会編『中央人民政府法令彙編（1951—52年）』、『中央人民政府法令彙編（1953—54年）』に売春廃止についての法令はないことが、この事実を裏付けている。
- (4) 福州市公安局が1955年6月6日に福建省公安厅および福州市共産党委員会に提出した報告にも、また台江区公安支局が1955年8月31日に福州市公安局に提出した報告にも、台湾作戦の最前線であったことおよび他の中心的な任務のため、売買春問題は放置されたと記している。上記の両報告は皆福州市公安局檔案室（2000年に檔案館に拡張した）檔案（55）治安科（4）。
- (5) 筆者が作成した『中国各都市における売買春根絶政策の実施時期一覧』を参照。拙稿「中華人民共和国福州市における売春取締り——解放直後の売春行為者の実態を中心に——」『人間文化研究年報』第24号、2001年3月、81頁。
- (6) 1955年10月頃に福州市公安局が一挙収容のた

- めに、台基主および売春女性についての事前調査を行い、それぞれ「身上調査書」を作成した。福州市公安局檔案館所蔵檔案 (55) 治安科 (5)。
- (7) この福利院は福州市倉山区湖辺村にあり、曲がりくねった細い路地を入った奥で、路地名の表示がないため、分かりにくい。『福州民政志』(福州民政志編纂委員会、福建人民出版社、福州、1997年9月、189頁)によると、1957年1月15日に設立した福州市第二残老教養院は、第一生産教養院と婦女生産教養院が廃院になった際にそこに残っていた高齢者や身体障害者ら93名を収容した。Z氏はその中の一人であった。1959年には第二残老教養院は福州市養老院に名を変え、その後、何回も他の福祉機関と合併してきた。1983年12月再び福州市残老院となって、主に知的障害者、身体障害者などを収容していた。1984年12月5日から現在の名称になり、現在収容されている80%は知的障害者である。
- (8) 本研究の調査では、知人である元軍区司令の専用車と運転手を利用することができたおかげで、順調にすすんだ面がある。これも中国で調査をおこなう場合の特殊性といえよう。
- (9) 彼が人々の視線に居心地悪く感じただけでなく、障害者が街に出ることに人々も慣れていなかったのだ。私が日本に来てもっとも感動したことのひとつは、日本では障害者が健常者と同じように自信を持って街に出ており、人々もごく自然に対応していることである。
- (10) 1950年10月から1953年にかけての「反革命鎮圧」、1952年のはじめころからの「汚職、浪費、官僚主義反対(三反)」及びその後の「贈賄、脱税、国家資材の横領、原料のごまかし、国家情報窃取などの行為反対(五反)」という大規模な大衆的運動を指す。
- (11) 福州市地方志編纂委員会『福州市志・大事記』(1990年内部発行版)によると、1949年9月18日、10月2日、29日および1950年2月7日、3月4日、13日、5月9日には、台湾国民党の飛行機が福州市台江区の商業地区を爆撃した。
- (12) 当時の李の供述(「福州市公安局予審卷宗」、福州市中級人民法院檔案室所蔵卷宗1956年度刑字第37号)によると、Z氏は投資をただけでその管理や世話をしていたわけではなかったので、彼と4:6の割合とした。
- (13) 前掲『福州市志・大事記』によると、1955年3月1日に中国人民銀行は福州市で新紙幣を発行し始めた。新紙幣と旧紙幣の比率は1元:1万元である。筆者が調べた史料には「一回2, 3, 5万元」と記したものがたまに見られるが、本稿で使用する金銭の単位はすべて新紙幣に換算したものである。尚、当時の米価は約0.121-0.145元ぐらいであった(1955年の『福建日報』公告欄を参照した)。
- (14) 前掲『福州市志・大事記』では、福州市労働者の平均年収は、1950年の427元から、次第に増え(1953年564元、1955年594元)、1956年には612元であった。また、『福建社会統計資料』(福建省統計局編、1986年6月、56頁)「職工年平均工資」(ある年度脱)には、福建省「国营職工」の平均年収は、1952年387元、1957年526元である。なお、1955年7月「工資分与貨幣工資对照表」によると、国家公務員の月収基準(1級-19級)は最高ランク87.29元、最低ランク18.98元(『福州郊区教育志』同教育志編纂委員会、1996年12月、214頁)。以上の資料によると、平均月収〔最高と最低を除外〕は大体40-50元ぐらいである。
- (15) 原文は「解放軍錢多省事，是最好的主顧」。1955年6月6日福州市公安局報告、福州市公安局檔案室所蔵檔案(55)治安科(4)。
- (16) 拙稿「一九五〇年代における中国の売買春根絶政策の研究(1)——収容された売春行為者に対する追跡調査——」(『愛知大学国際問題研究所紀要』113号、2000年9月、147頁)。